山形県における2011年から2013年の肺炎マイコプラズマ地域流行の検討

◎鈴木 裕[1)]
山形県立中央病院[1)]

【はじめに】肺炎マイコプラズマ（*Mycoplasma pneumoniae*; Mp）は主に小児および若年者の上・下気道感染症の起因菌として重要である。我々は2011年～2013年に山形県で複数の遺伝子型のMpが同時に流行したことを以前論文にて報告した[1)]。本研究は、同期間に分離したMpの遺伝子型と由来患者情報を併せることにより、地域におけるMp流行の特徴を明らかにすることを目的とした。

【対象および方法】Mp遺伝子型は4領域の反復配列多型分析とP1遺伝子型解析の組み合わせにより定義し、例えば4-5-7-2,　1型のように表した。以前我々が報告した2011年～2013年に山形県で分離されたMp 221株[1)]のうち、3つの主要な遺伝子型のMp　208株（4-5-7-2, 1型74株、4-5-7-3, 1型74株、3-5-6-2, 2c型60株）を対象とし、由来患者の居住地域（市と町）に関する情報を併せて分析した。

【結果】208株のMpは10市町の患者に由来し、そのうち4市町（山形市、山辺町、寒河江市、中山町）で全体の87%（181/208）を占めた。また、7市町（山形市、山辺町、寒河江市、中山町、大江町、朝日町、河北町）で複数の遺伝子型のMpが分離された。3つの遺伝子型の市町別の流行状況について、対象期間を4か月毎の9期間に区分して分析した。その結果、3つの遺伝子型のMpの同時流行が2011年3期から2013年1期にかけて認められた。また、いずれの遺伝子型のMpも、市町を徐々に広げながら7期間に渡って流行していた。

【考察】本研究により、山形県において2011年～2013年に3つの異なる遺伝子型のMpが地理的にも時期的にも共存していたことが示された。3つの遺伝子型間で流行の広がり方や流行継続期間に明らかな差はみられなかったことから、Mpの流行様式に遺伝子型による違いはない可能性が示唆された。

【参考文献】

1)　Suzuki Y et al., Jpn J Infect Dis. 2017;70:642–6.

連絡先　023-685-2626（内線1316）